

2018 International Workshop on Global Research Challenges in Africa Compared to Japan

February 16-25, 2018

Arusha, United Republic of Tanzania & Cotonou, Benin Republic

Miarisoa Razafindrabe (Global Agricultural Science), Victor Shishkin (Systems Innovation), Yasuhiro Takeda (Technology Management for Innovation), Kaittisak Kumse (Agricultural and Life Sciences), Dongdong Li (Precision Engineering), Shohei Miyata (Architecture), Megumi Hamada (Urban Engineering), Santwana Pati (Aeronautics and Astronautics), Kaoru Iwanaga (Architecture), Mauricio Córdova Udaeta (Systems Innovation), Josiane PONOU EP ZOMAHOUN (Systems Innovation), Seiko Nagumo (GMSI Office), Yasuyuki Yokono (Mechanical Engineering)

1. はじめに

多くの先進国が成熟し様々な問題を抱える一方、日本から約 1 万 km 以上遠方にあるアフリカ大陸は今や世界が注目する成長する大陸である。その可能性は、豊富な鉱物・エネルギー資源にはじまり、増加する人口を基盤とする経済、食料、物流やインフラ、衛生環境を含む医療など多岐にわたる。アフリカ大陸と言っても、54 カ国がヨーロッパ全土 3 つ分の広大な面積の中に存在しており、多種多様な民族、文化、宗教そして政治的背景を持つ。このような「大きく」かつ「多様な」アフリカ大陸の真の姿を見て正しく理解することを目的とする。

2. 実施内容

2018 年 2 月 16 日から 25 日まで、タンザニアのアルーシャ、ベニンのコトヌーを訪れた。学生 10 名、教職員 3 名が参加した。主な訪問先を以下に示す。

2.1 Nelson Mandela African Institution of Science and Technology (NM-AIST) (Mon. Feb. 19)

NM-AIST はアフリカ全土より学生を集める大学院大学で、Vice chancellor, Prof. Karoli Njau, Deputy Vice Chancellor Prof. Joram Buz の出席の下、NM-AIST, UTokyo の紹介を行った後、東京大学学生 10 名、NM-AIST の学生 10 名が交互に研究発表を行った。昼食を挟みながら、3 時間に及ぶ研究紹介は、研究分野が広範囲にわたり、理解が困難な面もあったが、質問も多く出て活発な議論が出来た。



Fig. 2 Group photo at NM-AIST



Fig. 3 Lab. tour at NM-AIST



Fig. 1 Welcome ceremony at NM-AIST

2.2 Tanzanite mining site (Tue. Feb. 20)

Arusha にある Merelani Controlled Area にてタンザナイトの採掘場を見学した。本施設は塙で囲まれ、入り口には武装する警察官が配備された管理区域となる。広大な敷地であるが、それほど深くない鉱山で、手彫りの採掘が主となっているようである。なお、本見学前には Masai market へ立ち寄り、前在日本タンザニア大使の家族より、現地の民族工芸品の紹介を受けた。



Fig. 4 Tanzanite mining site

2.3 University of Abomey-Calavi (UAC) Workshop (Thu. - Fri. Feb. 22-23)

Abomey-Calavi university (UAC) はベナンを代表する大学で、今回の訪問が3回目となる。東大との Joint Workshop として、Vice Chancellor Prof. Eleonore YAYI LADEKAN に出席いただき、両大学の紹介の後、参加学生35名(東大10名、UAC25名)の自己紹介(1分間)を行い、グループに分かれて、研究紹介、エネルギー、環境、農業、保健、工業の五つの分野において、自らの研究により培った技術を用いて20年後のベナンを議論するグループワークを行った。2日目には、ベナンの産業界メンバーも交えて、報告会を実施し、優秀チームを選出した。昼食時間のバンケットでは、チームごとの交流を深めると共に、優秀チームの表彰、参加者へのサーティフィケートの授与をおこなった。これらの流れは、GMSI で実施しているサマーキャンプを踏襲しており、サマーキャンプへの参加経験があるUACの学生2名が本ワークショップをリードしており、プログラム間の連携を見ることができた。また、ワークショップの合間には、教員打合せを実施し、1st Vice Rector Prof. Djimon Marcel ZANNOU と面会し、東大とUACとの連携について議論した。



Fig. 5 Workshop at UAC



Fig. 6 Group Meeting at UAC



Fig. 7 Best Proposal Award



Fig. 3 Faculty Meeting at UAC

2.4 Takeshi Jap. Lang. school (Thu. Feb. 22)

2003年に開設した西アフリカで唯一の日本語学校である「たけし日本語学校」を訪れた。ここには、40名程度、小学生から大人まで幅広く生徒が集まっており、いずれもが日本語に興味を持ち、いつかは日本を訪れたいと考えているようである。運営はNPO法人IFEが行っており、ボランティアの日本人が1~数年ごとに交代して教師を務めている。ポヌ助教はこの卒業生でもあり、我々の訪問を現在の生徒から大変温かく歓迎を受けた。また、前日の午前中には、コトヌーの市場に出かけ、ベナンの人々の生活の一端を感じることができた。



Fig. 8 Takeshi Japanese School



Fig. 9 Masai market of Arusha

3. おわりに

10日間でアフリカへ移動し、タンザニアからベナンへはインスタンブールを経由するといったハードなスケジュールとなったが、上述以外にも Tarangire National Park へ立ち寄ることもでき、有意義な充実した日々を過ごすことができた。参加者は実際にアフリカを目で見ることにより、想像と実際が異なること、アフリカといっても国や地域ごとにその様子が異なる事を体感できた。全ての参加者がWSを楽しむことができ、様々な研究分野と出会うことにより研究視野の拡大、コミュニケーション能力の向上が図れた。また、何よりも参加者同士の交流も含めて、国際的なネットワークを構築できた。